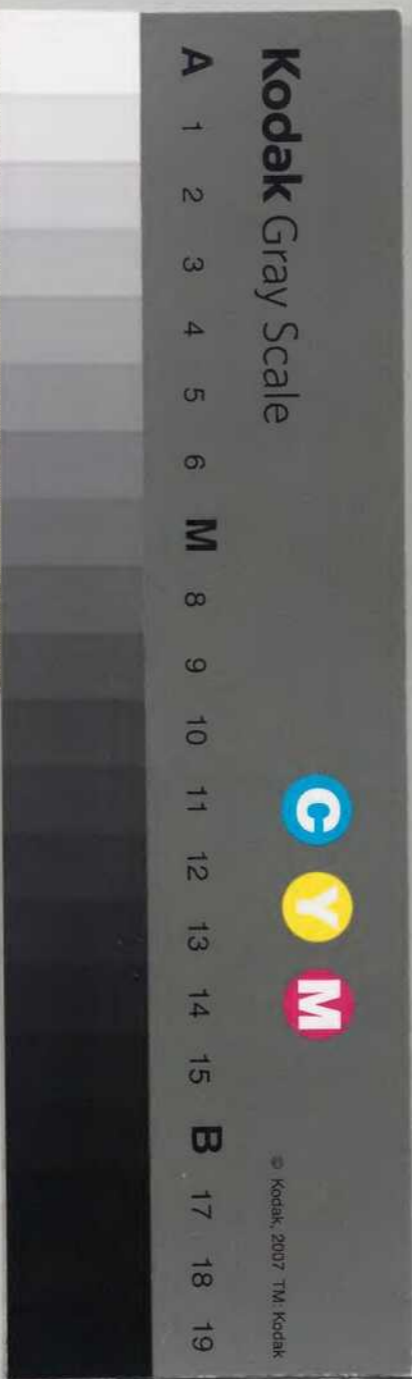


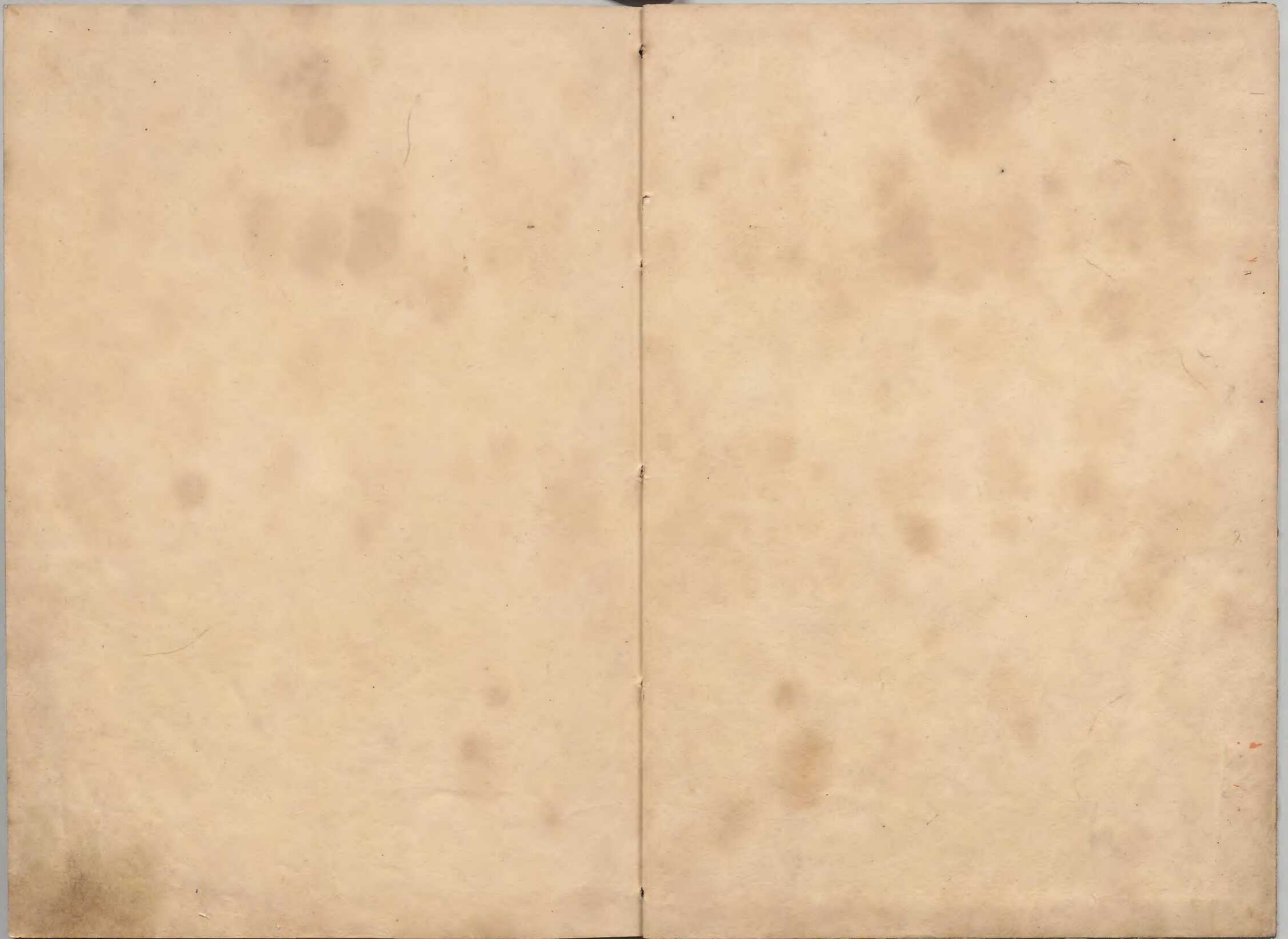
寛永諸家譜

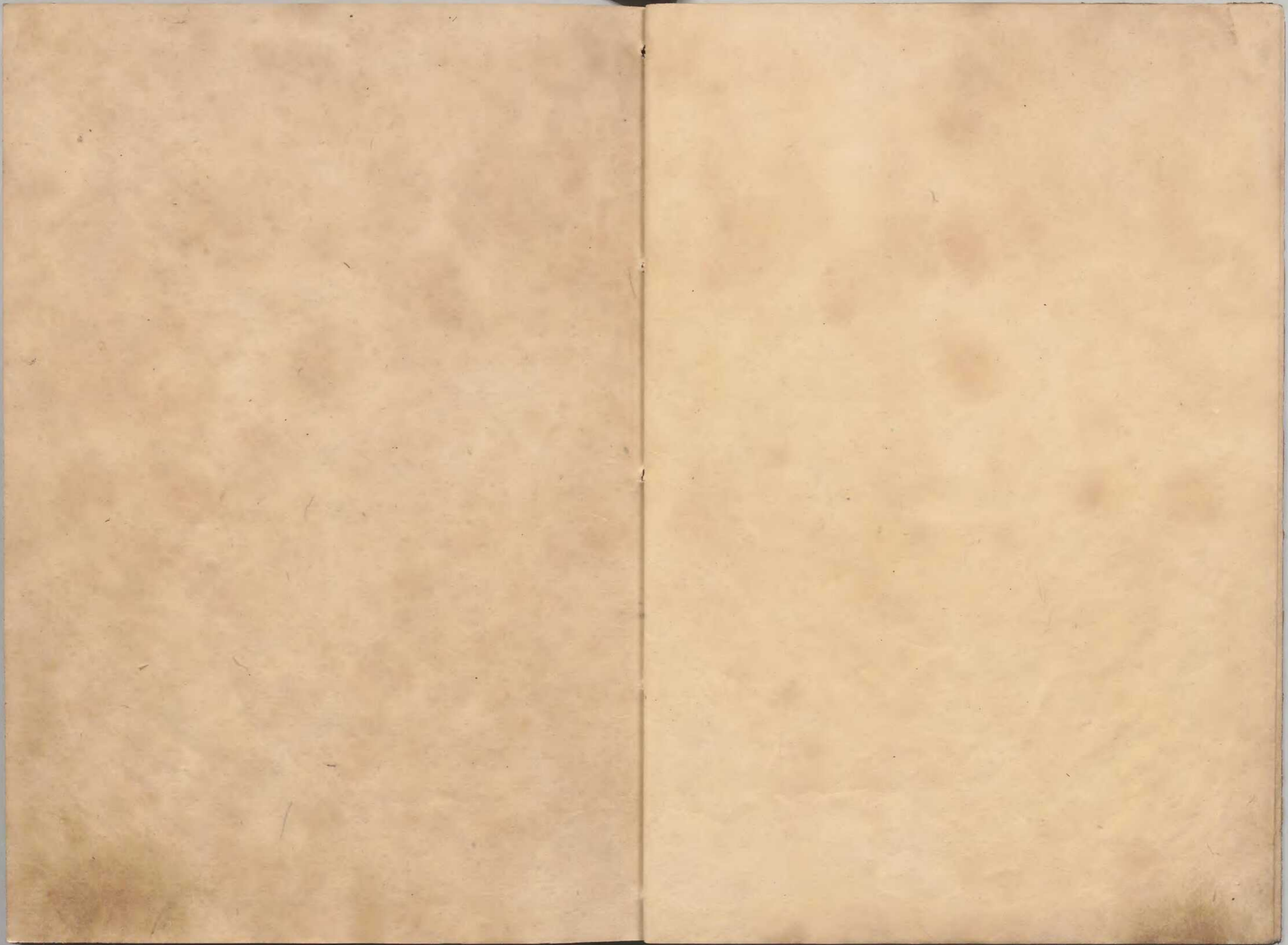
支流 藤原氏 癸卯五冊之内 其一

135

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數		186 (135)	
函號		76	1







小浜

落合

夏目

素嶋

福生

足立

竹方

末高

羽太

金丸

茂者

井持

名取

垣部

寛永諸家系圖傳

藤原氏

癸二十二

文流

小浜

先祖伊勢國小浜七代と海松一  
行号と氏

集

彈正

淺草文庫

應仁二年伊豫守三平那内兼松平

景隆

民部九束の尉 後伊豫守也

母名田丸平正少弼具忠の女

元禄二年氏田信玄のひこり

甲列のりし手信玄

別領地三百三十五貫をさつ

正元年勝頼より加信をさつ

三千貫此地をあらふ

同九年是列久勢津なり

中小浦なりしとひく軍切ある

勝頼感書に通とひた力一腰

をさつ甲列没落の後めされ

東照大指現り川へきつ

後列よとひく領地千五百石を

治ふと後 赦命をさつゆ甲府

の為守とつとじ景隆をさつ

用文造酒造より御書とたまふ事

一いふ

近度下越の甲府は並に是の  
次郎右衛門守先へ是を有る事  
友人甲府へ是は毎守に候  
下付徳事不二は油以の事  
下越の事

正月十三日家康

小渙友

石文友

相、同友平丸兼、口とお合ひ

勢列生津村松よりとひて我切を

こと通ふりわて

大指現御書をたまふ造酒造とたふ

あれを以て載とる詞よりいはく

於、下度勢列生津村松教教

討捕し中河進ゆき下流に  
事山者高き若くは中下  
流に池ありてお稼ぬ所ありしに  
六月廿日家康

小浜氏部丸束の村  
石文造酒造り

同十八年小田原北戰場よりして  
大指現沙持錢をたふ今小をひて先

を川をふ  
同年同東河入國のとき修を以て  
節加倍をき返りり田代もり  
之を石を以て  
長二年九月七日五十一歳  
して死す 法名淨見

光隆

久右衛門

後氏部忠とありたむ

母を多め監物が妹

文禄元年を以て秀吉と秀次と

不和の事あり先澄は事を以て

白徳院殿へ飛脚を以てしるは

これよりしるはしるは

御書をたまふ多調りいり

東郊あり多しは出来し所

飛脚被取上は秘意は示す

後被取上は秘意は示す

七右衛門守也

七月廿六日秀忠

小浜久あしよ

安長六年買原陣の討陣列也

湯りとしひく日本丸と云九鬼

大隅守が大船を討捕并水多

十人と虜て云し

大権現これと軍匠別内杖持作



ら進膚れありと云ふ

安永十九年大坂御陣の時揚列

野田福鴻のたふくこうと云ひく敵一人を

膚むなりと云ひく大將おほしやう降理くだり危あやうが突つ船ふね二

艘ふね内うち一艘ふねハと云ひく船ふね二艘ふね系けいに

望もち年ねん大坂御陣おおかきごじんの時七月しちがつ突つ船ふね

一艘ふねを系けいにと首くびを得え事こと二十九

級きゅうなり

元和六年

奇港きこう

右徳院殿みぎとくいんの教命けうめいより行ゆく大坂

よと云ひく船ふねに妻つまを付つと云ひ又加

倍たありて船ふね合あ立た千石せんごくに此地このちを修しゆ

右京

寛永六年十一月十一日かんえい六年十一月十一日に死し

安隆やすりゅう

海十郎うみじゅうらう

嘉隆

久右衛門 母を内藤政理元清成が女  
大坂支度の沙陣一休存と  
元和三年同五年同九年寛永  
三年等此沙入渚よ毎度休存と  
寛永十年東海道路此の渡海并  
舟橋木をあらきひくきのり  
名命とらげぬりり上京と

同十一年

將軍家沙入渚一休存と

同十七年 休まうりあ海海

巡視考人の使を川とむ

利隆

才凡東門

元和二年十歳より一休と

將軍家一休湯一きてりり

沙抜持とたまりりなびよ毎歳

眼と汗あせと

同八年武列河越たけがわより信守を  
つとむ

同九年水野みづの将兵衛守しげのりが起り一厨いしやう

涉書院せつしやうをまつとあふ切米きりまいと給ふ

同年 涉入洛せつにやの村修むらをす

寛永元年加信かじんとたす

同十年上総國かみづのくに山邊郡やまのへ志花村しはな吉井きちい

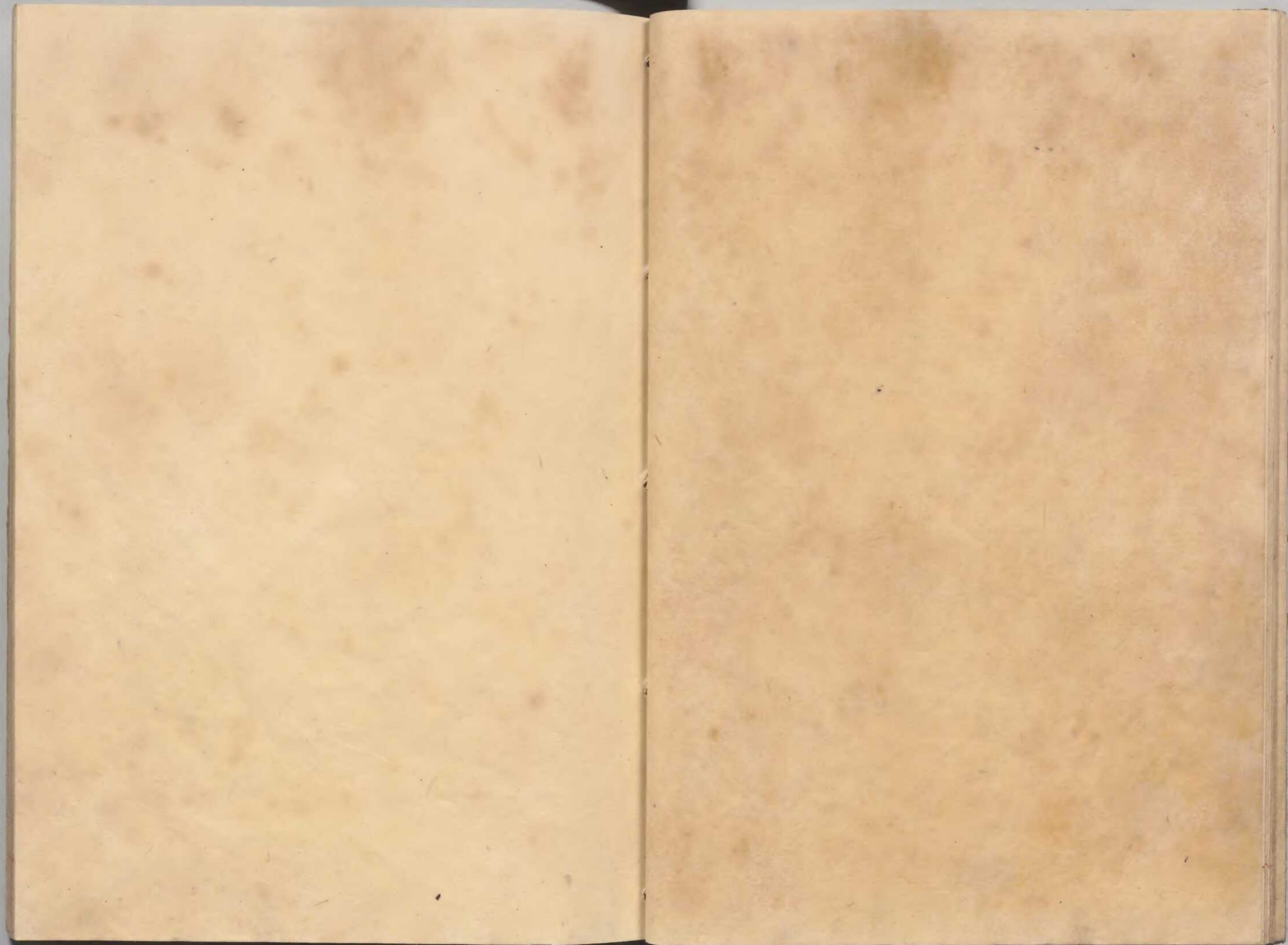
村むらよりとひく米地まいぢと清飲しやうと

同十一年 涉入洛せつにやの村修むらをす

直澄なほ

源十郎 母ははを牧野内近まきのうち以信成のぶなりが女むすめ

家紋 丸巴まるう



落合

道久

元平次 生母幸江

東照大権現より決之をくはる

元龜元年後列幕決の戦場より

をひく道久十六歳のときより

先づ首級を得たり



大権現道久と沙前より一り一車  
中此換作をとほせしゆ  
七十六歳とく病死 法名天叟  
使遣

道次

小平次 生國同前  
道久の養子とされ実名神谷  
ら次右衛門清次が次男なり神谷

伊奈園を別りあはは  
交長元年六月

大権現より川へそふゆ

同年九月

大権現伏見より大坂より渡御あり  
て友を和泉守高庸が弟小お侍  
より対之を舟に逆心をかきふ事  
上聞より是を別九月十二日大坂  
より伊奈園書物に使わし

きこりつげくいらく伏見  
あり法士いそき大坂より  
道次是ときて十二日此和半に獨  
伏見をしく翌朝大坂より  
村越茂物より一騎とくは坊  
きいろよりと云とを則

大権現寺前よりわかれくは威あり  
あにをひく伏見より家法  
こくありつせきくふれひひと

云上り

同年

大権現大坂城西丸より  
時作よりありて津進物者をつとむ  
此別黄金十両をたより  
同之年奥列陣より信を成つあ小山  
より文原よりあさむ

同七年



大指現伏見よりさへく御不削の時  
道次屋敷川へさへくま川がこれ  
よふく又黄金十支を給りま  
後保昌が御北河津腰物とたまふ  
同十九年大坂内陣の時後列より  
京都よりさへく御下北軍  
勢より猿宿支配の事を決まじ  
二條河原よりさへく御下北軍  
河津下流古北陣迄を配分す

河津陣より保多崎伯耆削を  
攻め北河津川へさへく皮地  
よりさへく軍に換針を忍び  
上陣よりさへく又敵兵京橋を焼おと  
んとんが北河津つとへさへくして石川  
自敵が御よりさへく又敵軍北  
河津の河津川へさへくして松平河津  
よりさへく御よりさへく御下北軍  
又一伏見河内守よりさへく其

此れ決中をきり移くを云  
と云

翌年大坂本陣の附と又陣不配  
分此事を流しじ五月六日

大指現堤一とひく尾張義直卿

紀伊頼宣卿と侍せたふと紀秋元

但馬守をきりく道次と右をきり

合我をりめくふべきに同をの

く港をりら下知を侍べきに旨

法軍一り告一りせられしに次

とふら作のひ子を軍中

相船同日ぬつて高木

所相東市に陣はよるに日月

七日横田基右衛門村長

敵兵の勢黨言一り新居

と云ふとけ時次 教命をうけ

き海りり橋門一りて城

と見まばらで小火を殿

く船川より入勢黨も又これなり  
道次いそぎとせりて井伊掃部  
直孝一告直孝がけりて我刃  
所色よりあれよとありて  
これより云と

元和二年駿列田中一をひく  
大指現沙不例の附内つて  
正月二十一日田中をおくそりて  
十二附一ありて

いり 教命れをひき

右徳院殿一云と一たぐま  
時英令十あるひり綿衣  
似と

同年

右徳院殿一法一そま  
納戸事とあり

寛永八年御膳奉行とあり

右徳院殿沙不例の附直和社

ゆーり一尺とさ度よとさび流  
前より一尺とさ度よ川英金二十兩  
とさゆふさ度

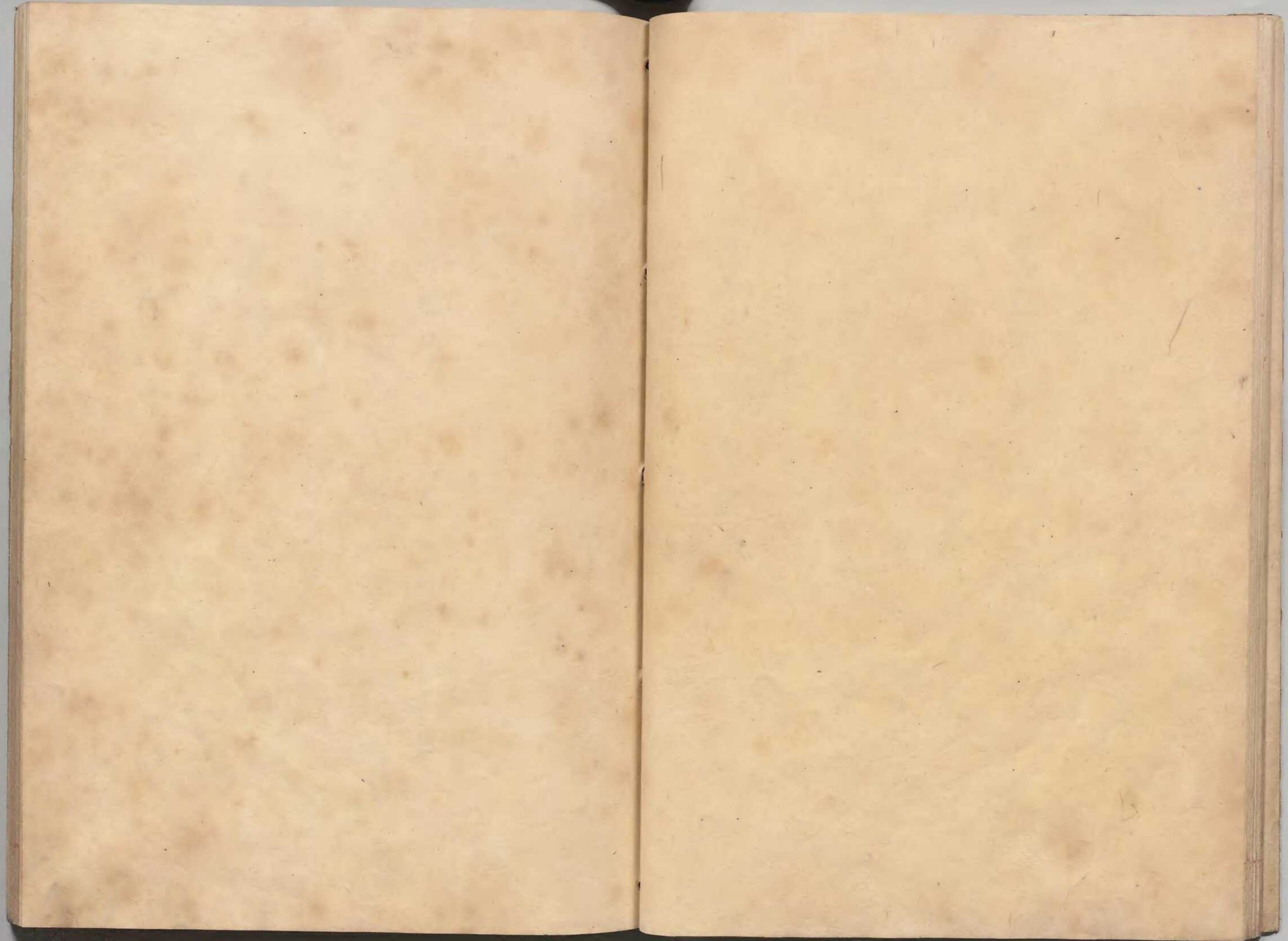
將軍家一川とさてまつり  
小十人組の高頭とさ家後後列の  
所を月とさたり回心のとされみ十  
人をあけり

道勝

源右衛門村 甘國武流  
寛永六年

將軍家一川とさてまつり

家紋の角よ一文子



夏目なつめ

今按いまあはむにし官くわん中ちゆう政せい氏し乃の系けい焉や

一い夏目なつめ氏し乃の清和せいわ源げん氏しの

流りゅう一い夏目なつめ氏し乃の志し久く保ぼ氏しの

家け傳でんよよ切き原げん藤原とうげん氏しとと林はやし氏しの

一い一い方かたりり志し久く保ぼ氏し乃の系けい焉や

のの

吉久

九郎丸末門村 生玉巻河 法名竹清  
累代 泷先祖より川久保家吉久  
東照大指現より湯よりそより

吉信

次郎丸末門村 生國同前 法名竹蒼  
大指現より法入りてより巻河

吉信  
軍忠あり  
元禄三年 三方原合戦のとき  
吉信

大指現より吉信より川久保より  
教興を子家より泷方より  
木河よりやうく原松の株より入  
らんた志より川久保より此村  
大指現吉信より川久保より

戦一勝負を決せしむ  
ありぞくも此を敵兵いよくち  
らと得くいづく此れは事  
あらんち海一とひくは河此  
ときあ家へききた敵軍に入  
るやふうら死に  
すてりし海馬をさめられ  
と川くぬるぬとけきせ  
此時者候りしりし海馬を  
此時者候りしりし海馬を

一しつきいし大將海命を  
ういおせし海り天下命を  
たふかし一補りしるあがし海馬  
齡を海をりらありし昌軍を  
ま下りしりし海馬を  
えと  
ちと

大將海命を  
作ありあは兵  
ちりしと  
歌兵追  
のれしん



如く備ふ者信又若くはつて  
いづく敵兵りし流りしと云々  
我敵をあせはくうら死を凌ぐ  
海しといふをばわく湯馬と漢  
松のあり川にけり此の  
三頭とびら川ときり敵兵こ  
道と名くならし大軍を率  
て急りしこれを逃し此時信  
なびりし力二十と六騎お

ともり軍中に入同時其命  
とわたりて

大指現の御命りしなり  
十二月二十二日者信五十六歳也  
此時者信十文字此港を  
敵兵をつきし事二人其港今  
しつる家ありありあり

大指現信次者次兄を  
信りしいし汝等が父者信が忠節

人よりすくれより子孫のよめみ  
之恩を報へしを海とんとそり  
志りとのつとも長男又次男あり  
わしも又早世にまぬ三男吾忠と  
ありて忠賜れ 救命ありとて  
ともられもまゝ不幸 救命に  
く死をみかたかゆへりて恩賞  
あつてに

某ミヤ

早世

某

早世

吾忠ウチタカ

次郎左衛門尉 生國同前 法名竹葉  
大指現吾忠が父吾信旧功有ふり吾  
とて重列 熊山の城とれを  
終ふべき此旨なり志りといへども

早世と

信次

長右衛門村 生國田前

大権現より決りてそま川侍信次

十六歳此時淡松の御殿よきい

とくし御家重花よりとらびすそ

よあしそふ取のまのそ教しそれよ

それれく身をかき後御陣乃

さきよりとひく教度のんを

ありてその浪人の身き侍り

よりひそに母方此氏を叫ぶ

姓名をあらた免松下尾らみと稱す

三正十二年長久手合戦のとき

首級を得くも川を戦切と

しげまん

享長十年御鷹狩の刻

大権現より御福を御家侍りその

名をよけせ治不信次取くも其目

右伝が子ありと云ふ事尚も又  
在り多依渡舟を考して伝次が事  
をきづりてせしめし右伝が子は復  
眼なるやと此の傳ふ依渡舟の伝次  
ありしとき、鉄炮の捨扱ありあり  
く眼を感ふ事ありし科  
丸山これに療治して命とた  
り月と云ふことありしに  
と云く濱松の殿中より人をとる

右傳伝次ありと云り傳ふ事ありと  
いふもそれかえ又右伝が忠告を感  
し傳ひ其上年月と云ふ事と云  
はりありし事ありて

大権現より此へと云りつり大坂  
御陣の記を満道具押れ候を  
いふ事

大権現薨逝の後  
右傳院殿よりつりて西門にあり

丸裏乃津門者な〜び又鉄炮をく  
とりれ五段をつとめ五百三十名余  
の領地と〜海ふ  
寛永八年八月六日〜死と  
法名乃春

音次

重た来り 生國目前

いとけあ〜てか友肥後守清正  
〜川之清正肥後の國天尊

在嘗城をせじ家の時清正が家人  
津田と来東大とれた脇山家の責  
口〜あり音次ははり〜とひ  
〜城と色〜〜敵と鉄を  
おも名三ヶ所の城をわ〜あふ  
い〜も〜ち〜城中〜入  
高名と  
文禄年中清正親鮮元良哈よ  
とひ〜一日〜この城をた〜

の時先陣此旗を以てを以てあ大  
多此口よりよりよりより今く城  
中より入る高名を得よりより  
後陽川よりよりより津田と共  
一城をあけられ高名も又け城  
よりより後高名乃城よりより  
清正が先手とてより此城小を捕  
取り果末よりよりより高名より  
あふれ甲共よりよりとて海

時陽川とすきり別漢南人と勢と  
よりよりこれを遊よりよりあひ  
うへふとへとも味方よりより  
二子騎はりりなり海が城より  
敗走とて時尾高取市を中  
津尾取つあへびり高次等三人  
をれより殿よりとて紀味方戦  
死と海もあへより二百年大  
十人なり志りともとも尾高

源氏長盛等跡兵をさしひき

つづきつて中城よりゆき

元和元年大坂陣のとき

大指現長次が勇名をきこりし

頃ありし戰場より伝は

り

右近衛殿より伝ふをてまつり

且百六十石乃領地をたす後

將軍家より伝ふたてまつり

右改

源長清射 中園肥後

元和七年

右近衛殿と存しきてまつり

寛永元年

將軍家より伝ふをてまつり

信ふ登のり

甚お五ご九く束たの村 生な武ぶ氏し茂も

元げん和わ七しち多た十じゅう七しち歳さい山さん一いち一いち

名な德とく院いん殿でん一いち湯ゆ一いちききくくままのの家か

寛かん永えい二に年ねん一いちりり

将しょう軍ぐん家か一いち一いちつつ二に一いち一いち一いち一いち海かいのの家か

同どう一いち年ねん又またが家か督とくををつつぎぎ領りやう地ちをを

まま

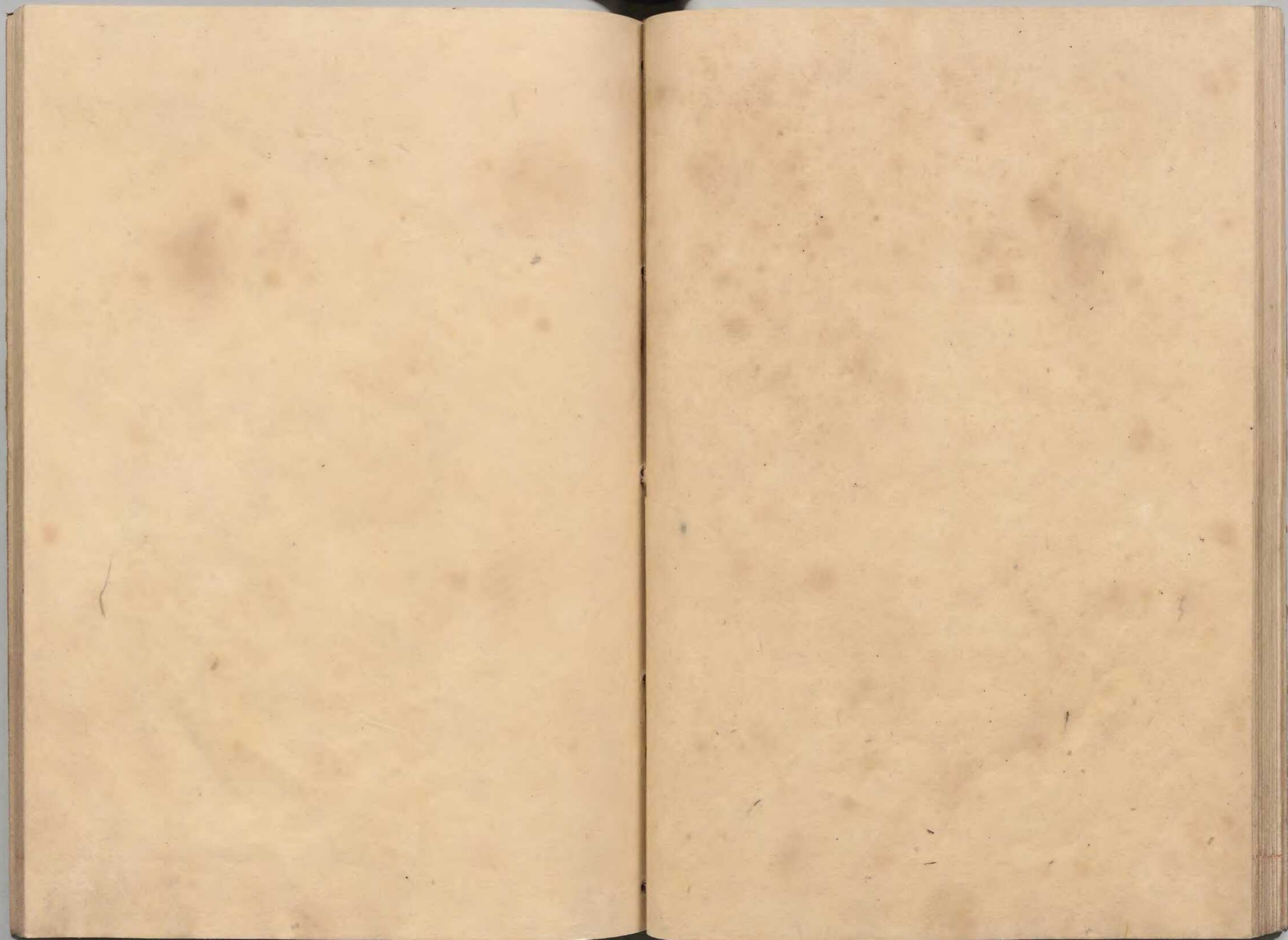
同どう十じゅう二に年ねん二に百ひゃく石いしととくくはは一いち石いしのの領りやう地ちにに  
てて七しち百ひゃく三さん十じゅう餘よ石いしとと飲いんとと

信ふ忠ちゆう

権けん八はち郎らう 生な國くに同どう前ぜん

家か紋もん間ま狭せ苗めい





● 親義

来鴻

本名大石氏なり

万機

中國陸奥

伊達輝宗より流るゆへありて返

のち小幡陸奥守氏照より属せ

小田原没落の刻めされ

東照大権現とうしょうだいこんげんより津湯つゆ——奥列陣おくりゆうぢん此

佐々木ささきをつとめ勇力ゆうりきと流石りやうじきにまほ

右遊院みぎうでん殿のりよりつとをそてり何なに家

元和げんわ元年げんわねん五月ごがつ中旬ちゆうかんより死し

吉宗よしむね

孫六郎まごころう 本國ほんくに甲斐かい

親義ちかよしが養子やしよとて此こゝ實まことは駒井こまゐ常力じやうりき家け

信吉のぶきちが孫まご九進くしん吉清よしひらが子こなり吉宗よしむね十五

歳としありてりど然しかく

右遊院みぎうでん殿のりより津人つひとたたくも何なに家

冬ふゆ列りゆう田原たはら涉せつ将しやうの節せう十九じゅうく衆しゆありて

佐々木ささきにみそ此こゝ牧まきらるる麻あし出でるを走はし

了りやうすもく是こゝをとり 上うへ境さかいよりそ

なふ水みづはるびとく則すなはちに麻あしを

相飲あひのみを

大坂おおさかあかの津陣つぢん此こゝ時とき二十一じゅういち歳さいありて

佐々木ささきは落城らくじやうの別わか天王寺てんわうじ表あはより

甲士を〜ひり歩卒かろは小五人と  
討捕うりとり皮二級ふたごの首くびと執とり  
台徳院殿たいとくゐん御沙実ごさ換かわり御沙陣ごさぢんはら  
本多依渡守ほんたよりわたるまもりと〜川がへ  
ゆり親義おやのちかが家督けあかを傳つたへ

吉成きちなり

助左衛門尉すけざゑもんゑい

寛永十六年十一月十八日

將軍家より御湯ごゆ〜たぐ内うちつ致いた

家紋

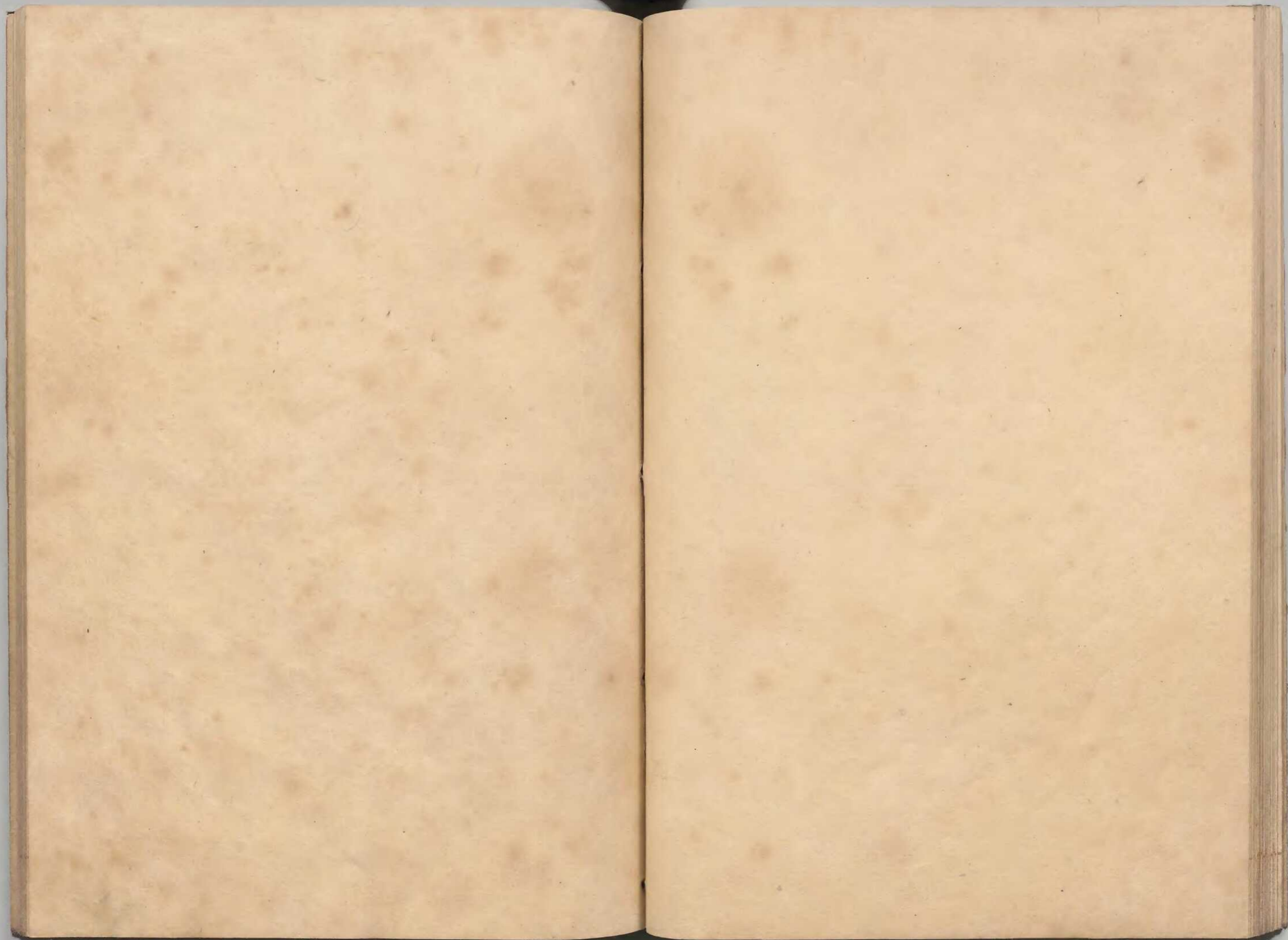
竹丸たけまる割菱わりびし

養父家紋やうふけあま竹雀たけすけ

実父家紋じつふけあま

割菱わりびしより井桁いげ志しふ取とり

友家ともけ此紋こゝのゑまを用もち





心次こころづ

市丸水門射 生園月前

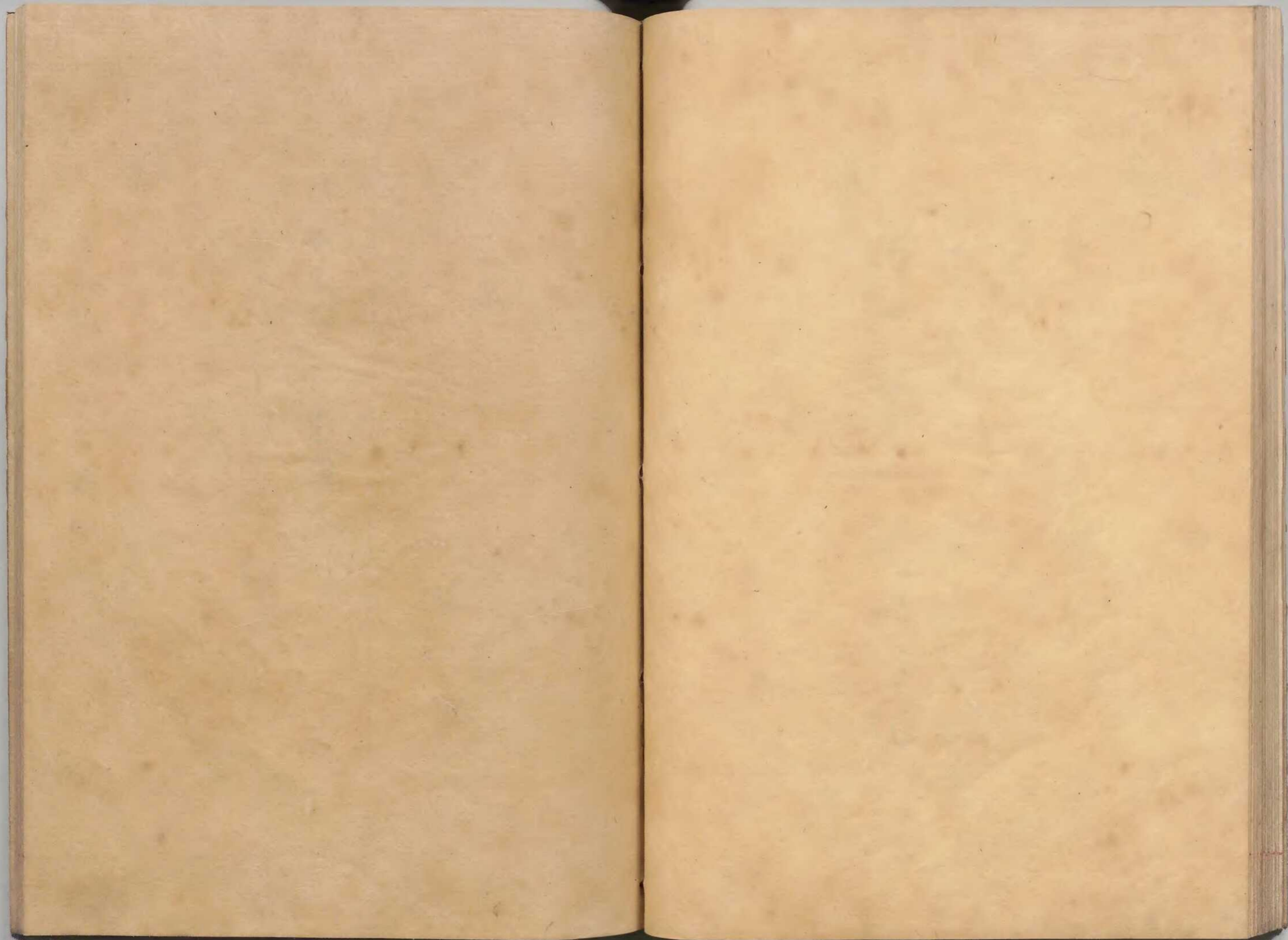
名徳院殿

將軍家より川へとてま川へ

信次のぶつ

平右衛門射

幕後まのし 花梅邊はなうら の内うち 十六じゅうろく 重かさね 此こゝ 菊きく





● 集

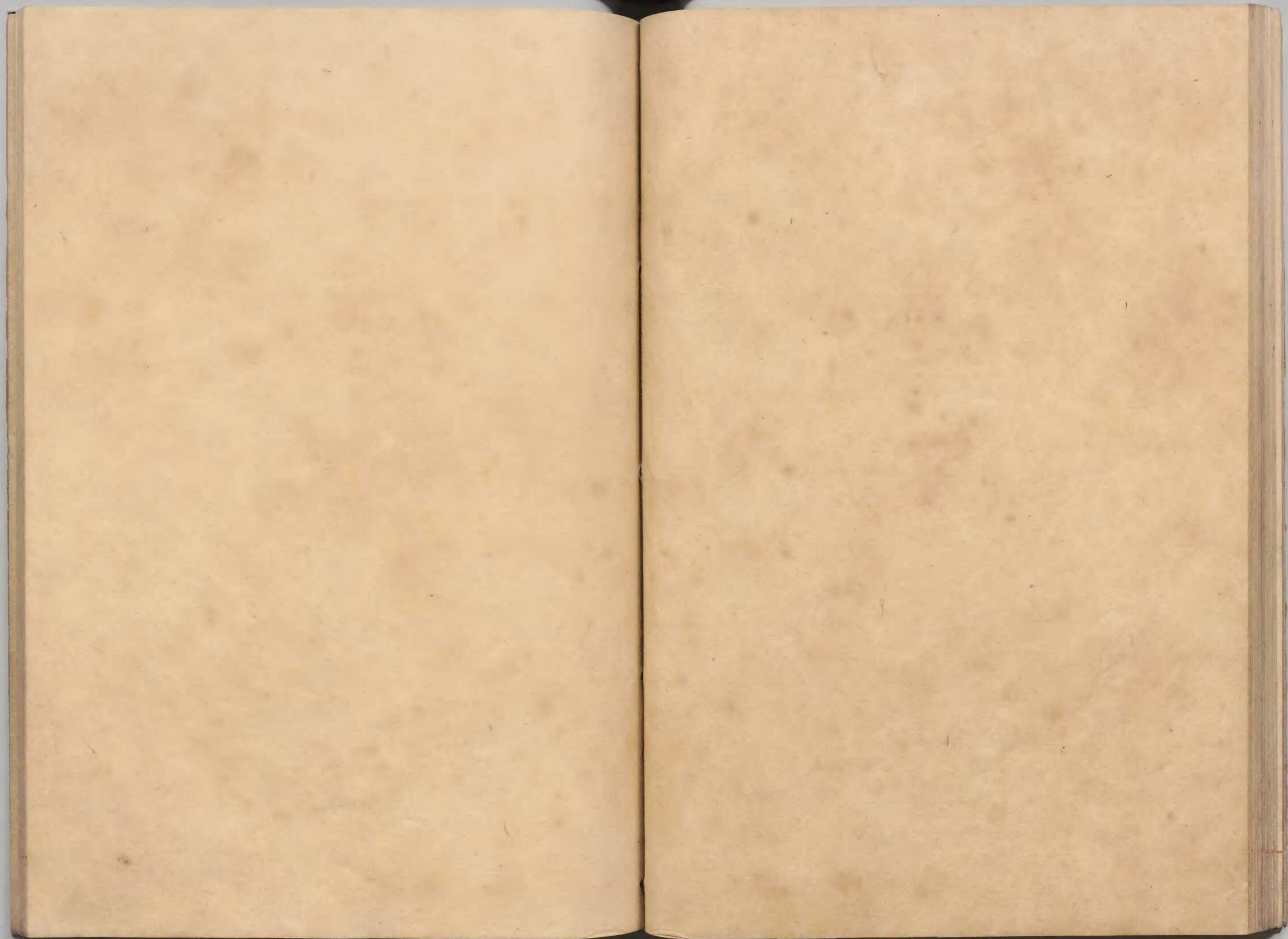
右馬助 うまのすけ  
生國彦 なまのこ  
廣忠 ひろただ  
一 いち  
津 つ  
ふ ふ  
行 ゆき  
家 け

是立 あきり

集

右馬助  
生國彦







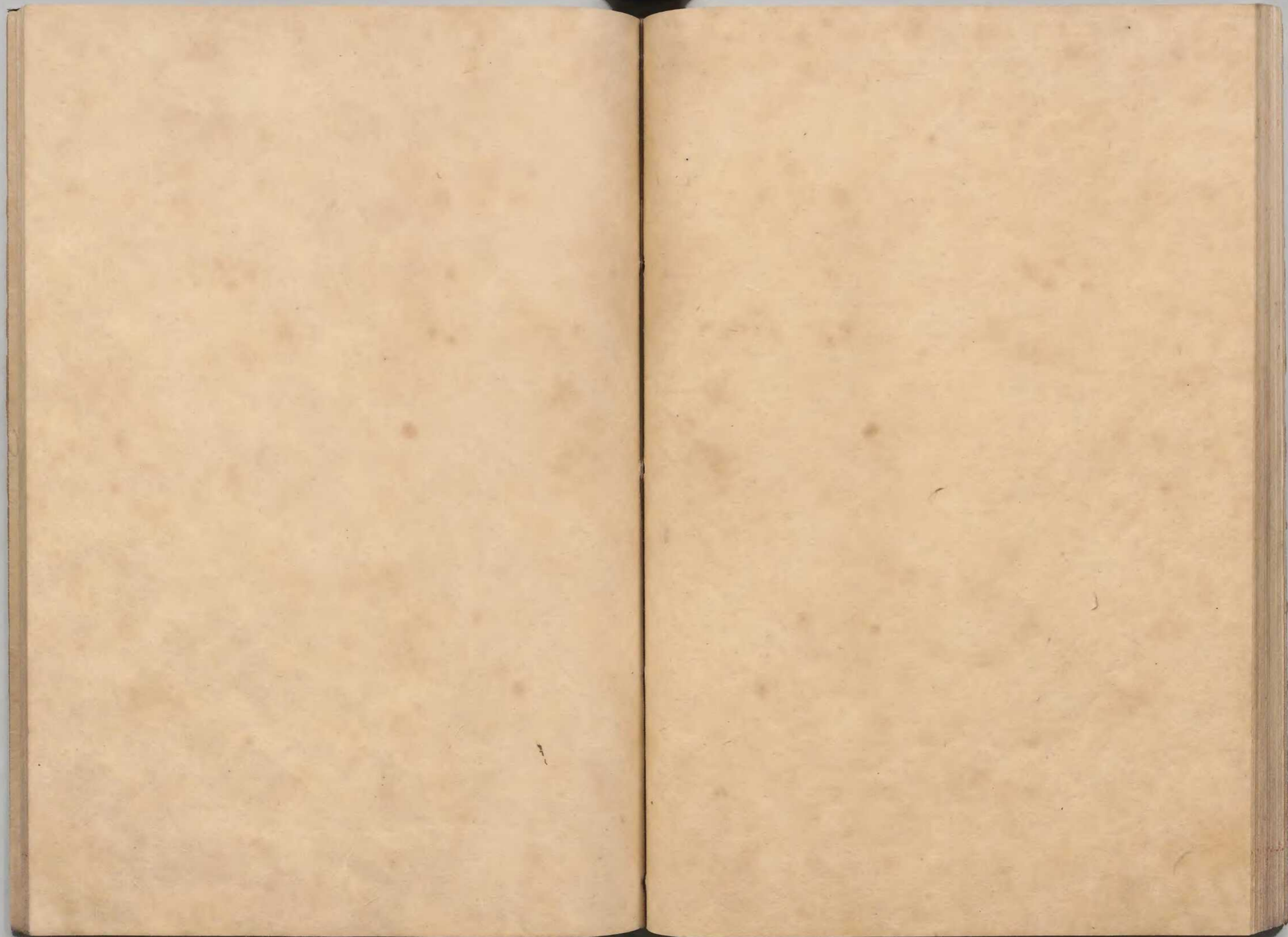
勝茂 まさしげ

隼人 はやと 生國同前 法名見素 けんそ  
里見安房守義康より川上

正勝 まさかつ

甚右衛門尉 生國同前  
將軍家より法之より川上

家級 けいけい 三歌丸也 さんかまる



末高しまたか

●  
正長まさちか

石見いはい

生國なまこく後河ごが

法石ほうし源光げんこう

東照大権現とうしょうだいこんげん一ひと津つ之の平ひら之の子こ之の子こ

正久まさひさ

小次郎こじろう 生國なまこく同前

大権現よりつとくそくまのり

寛永十六年四月十三日八十六歳

あて死と 法名源領

正宣

志在永野村 生國同前

大権現より法之をく西川不校

教教よりりて紀伊大納言頼宣

よつふ

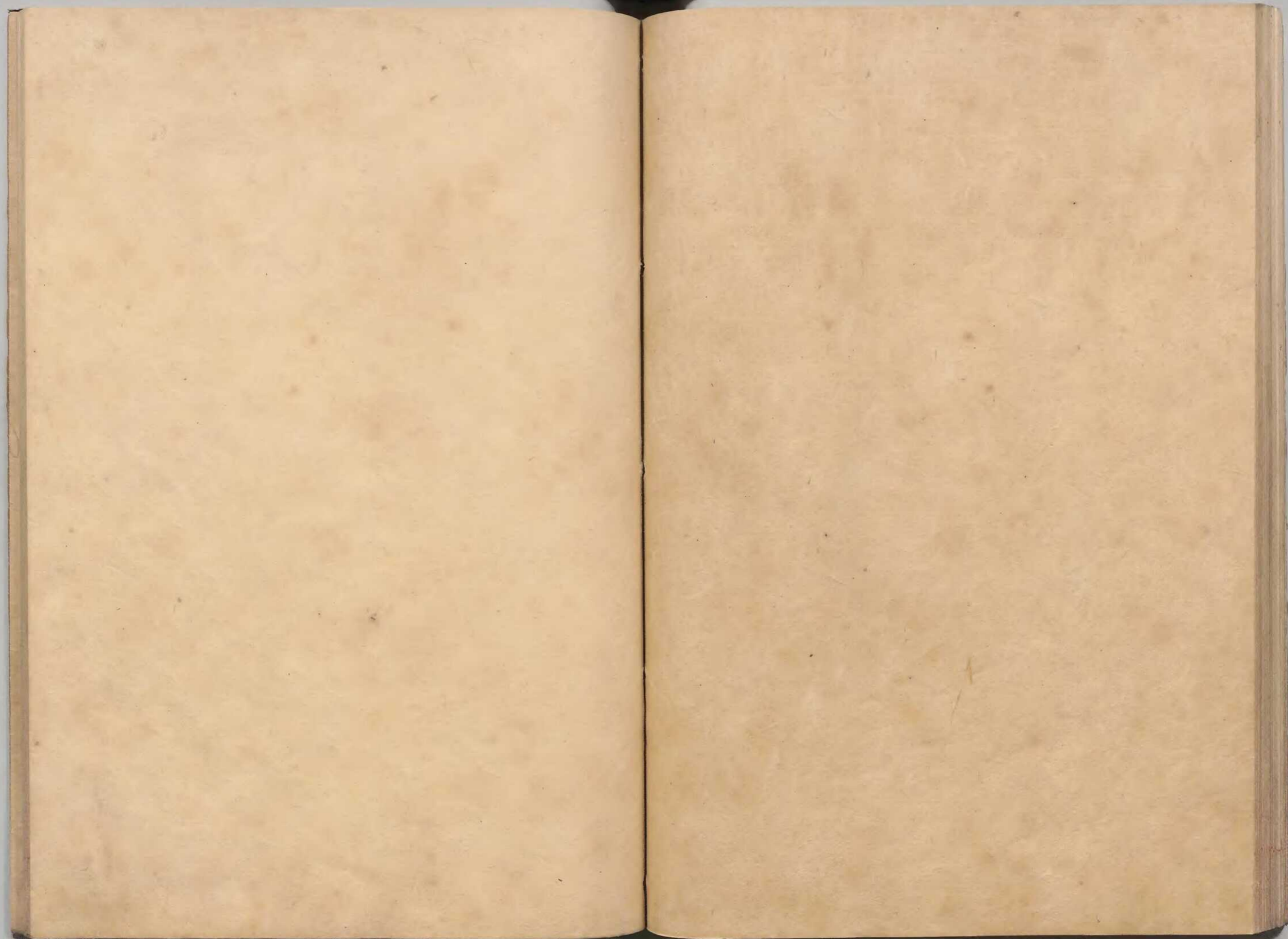
正勝

才在永野村 生國同前

將軍家より法之をく西川不

家紋丸の内よ三川





● 正次

羽衣

車籠

生田巻河

東照大指現よりつゝきてま川家  
交長十六年七十五歳より花

正後

正統

生國同前

實成戸田彈正少弼政盛が子なり

正次や—あひく子とに政盛も

又累世清商家と傳ふ正後

大権現又川之とてしん

交長二年二十九歳死して死と

正成

十大史

生國武飛

交長十九年

大権現より川之とて傳つり大坂友

度北清陣又伝ふ—これ後

白徳院殿

將軍家より傳ふ—此も—川家

心忠

勅十部 生國同前

寛永十三年

將軍家より流るる

家紋 鷲丸 衣紋 友丸

金丸

忠次

又下帝 生國甲斐  
 武田信元 同信玄 同勝頼  
 冬列 長篠陣 討死

久次

天保無清村

生國同前

注名常候

勝頼より津之上列前北城より

高名と侍あり

同國沼田より又高名あり

天正十年

東照大指現甲列津入國乃き久次

をりしゆれ井伊共部少輔忠政より

属一尾列長久手北戰場より

首二級と侍あり

重次

秀右衛門尉 生國同前

いとけきりて父よりとく

ゆへ浪人とあり

重久ちかひさ

右左衛門尉 世國同前

將軍家より侍ふるに

家紋丸の内ちかひさ上ちかひさの蝶ちかひさ二

集

茂者ひや

瀨波せな  
伯はく

伝しん列りゅう依い久く郡ぐん大だい伏ふくの城しろ

正安しやうあん

右系うぎ

廿四にじゅうよ  
伝でん流りゅう



武田信玄たけだのぶげんのひよ勝頼かつらの川子

満安まんあん

右承の村

生國田前

法名親えき義

母を栗原右承の娘むすめ

信玄をひよ勝頼のつとむ娘むすめ

出く

東照大指現よつとくをき川子

交長まこと止年とどろ徳川とくがわ実原まこと赤陣あかじんよ佐さ

安貞やすさだ

指右承の村 生國田前

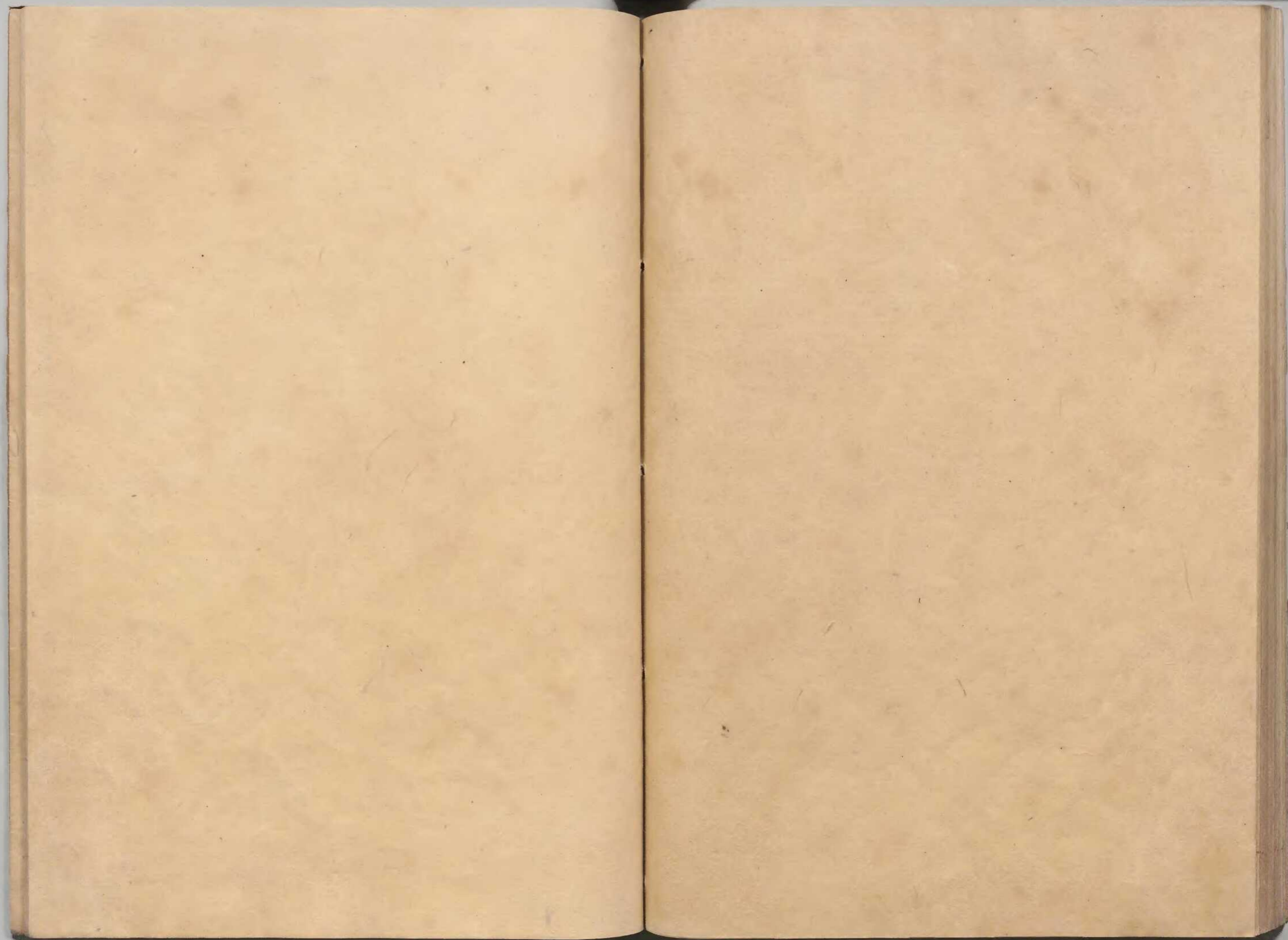
右徳院殿より法はふふ川子

交長十九年元和元年大坂お度の

赤陣よ佐さをとのら

お家おけ家けよりつとくをき川子

家紋 丸内まるうちよ実まこと菱あじ



井狩いかり

● 宗清むねきよ

十助 出國近江しゅすけ くにま

依よ木きの家いへより洗せんふ  
ああくく死しとと法はふ名な心こころ清きよ

六十九歳

宗房

新右衛門尉 生國日前

河内<sup>とよ</sup>織田<sup>たけ</sup>信長<sup>のぶ</sup>より川本<sup>の</sup>長政<sup>の</sup>

東照大権現より津人<sup>の</sup>宗家<sup>の</sup>

宗長<sup>の</sup>之<sup>の</sup>年<sup>の</sup>依見<sup>の</sup>松丸<sup>の</sup>より宗

宗<sup>の</sup>とぬ<sup>の</sup>えん<sup>の</sup>河内<sup>の</sup>これより宗<sup>の</sup>来

地<sup>の</sup>とたま<sup>の</sup>あり<sup>の</sup>津代<sup>の</sup>官<sup>の</sup>と<sup>の</sup>形<sup>の</sup>より又<sup>の</sup>に

列<sup>の</sup>水原<sup>の</sup>よりとぬ<sup>の</sup>く<sup>の</sup>津馬<sup>の</sup>とあり

加子 六十<sup>の</sup>歳<sup>の</sup>よりて死<sup>の</sup>と<sup>の</sup>法名<sup>の</sup>淨<sup>の</sup>禪<sup>の</sup>

宗次

十 equal 生國日前

大権現

白蓮院殿より川本<sup>の</sup>宗家<sup>の</sup>

宗十六<sup>の</sup>歳<sup>の</sup>よりて死<sup>の</sup>と<sup>の</sup>法名<sup>の</sup>宗<sup>の</sup>貞<sup>の</sup>

宗重 むねたか

十物

生國日記

大指規

右徳院殿

將軍家より津之きりきり

家紋

丸の角小櫓 すみ

名取

長信

物監

生國甲斐

氏田信玄  
一  
津ふ

長次

才虎束の針

生國同前

信玄河内びくのち浪人となる  
天正十六年十六歳のときけり  
めく

東照大権現よりめくれつくをく

ま川ふまは

右徳院殿よりふま川より又駿河大納言

忠長よりけり

寛永七年に死す五十八歳

長知

中丸丸村 生國後河

祖父長信九代の祖某奥列より

甲列よりとせしむ武田氏より

つふ長知知少より父よとく

四一家譜の相傳とあるに

又長次と相傳し忠長よりつふ

寛永十一年より

將軍家一<sup>し</sup>津<sup>つ</sup>之<sup>の</sup>とて<sup>て</sup>是<sup>こゝ</sup>に<sup>に</sup>領<sup>りやう</sup>地<sup>ち</sup>を

たきけ家

家紋

表<sup>ひら</sup>紙<sup>し</sup>酒<sup>さけ</sup>



右勝

垣那

甲師丸束の村

生國冬河

東照大権現ノ一津ノマツリ

古苑乃番と作心

元禄五年三月廿日死

法名清雲

旨次

白九郎

冬列 皇孫よ生侍

大指現 一 珠獨 一 まで

右徳院殿よつとくましく酒川に御座る

乃番と付とめ今

將軍家よつとくましく酒川に御座る乃

妻と付とめ

旨次知がしめて父とてうーをふり

しるしとて祖父乃右と志保事ありし

家紋 丸の角小井筒

